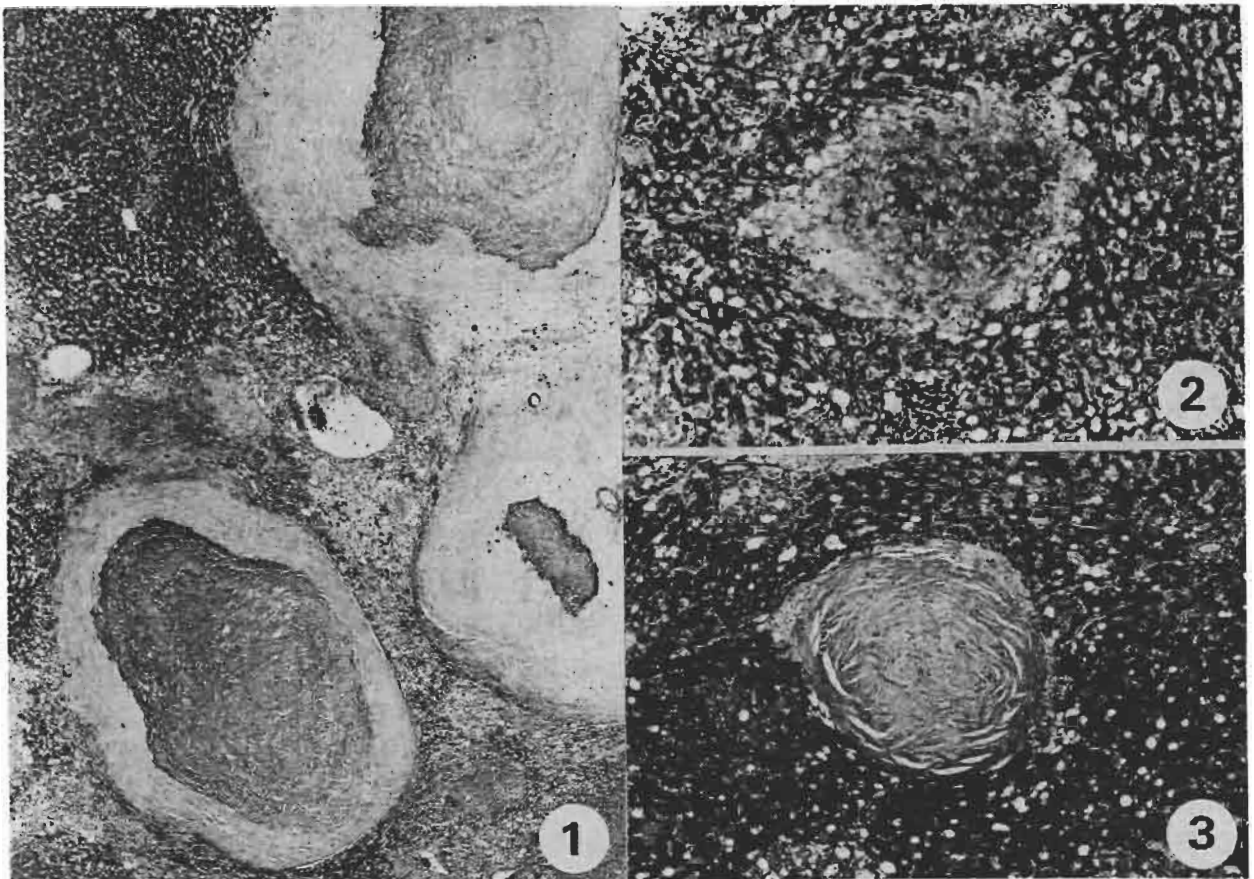


犬の肝臓

東京大学農学部家畜病理学教室出題 第29回獣医病理学研修会標本No.519



動物：犬，チワワ，6才6ヵ月，雄。

臨床：生後3ヵ月頃から全身性膿皮症を認めた。病変部の細菌培養は陰性で，抗生物質には反応しなかったが，ステロイド剤投与で治癒した。1986年12月頃から腹水貯留がみられ，X線所見では肝での石灰沈着が認められた。1987年1月には，GOT257U，GPT675U，ALP75.3U，コレステロール187mg/dl，腹水の結核菌検査は陰性であった。グルタチオン及びラシックスの投与，腹水の排出を行ったが効果なく，石灰化部はさらに広がり，肝の大部分を占めるようになった。1988年11月4日斃死，同日剖検。

剖検所見：黄色透明漿液性腹水約200ml貯留。肝の被膜は著しく肥厚し，一部は横隔膜と癒着。各葉は互いに癒着していた。表面は黄褐色で，粟粒大～米粒大黄白色結節多数。剖面でも同様の結節が多数みられ，癒合性の1cm×2cm程度の結節状腫瘤も認められた。結節中心部は石灰化が明瞭であった。同種の病変は胆嚢周辺では瀰漫性に広がり，胆嚢は病巣内に埋没していた。胆嚢内には褐色結石1個。他臓器の病変としては，胃幽門部に米粒大の陳旧化潰瘍2ヵ所，十二指腸に米粒大糜爛数ヵ所

及び膀胱結石がみられた。

組織所見：肉眼で認められた黄白色小結節は大小様々の大きさの膠原線維塊で，大きなものでは中心部に石灰沈着がみられた（写真1，HE，×80）。また，胆嚢周辺では病変が互いに癒合して大きな線維組織塊となり，所々に石灰沈着巣が認められた。さらに脂肪変性巣や脂肪嚢胞の形成もみられ，これらの中心では細網線維や膠原線維の発達も認められた（写真2，トリクローム，×200）。このような線維結節や脂肪嚢胞が形成されている場所は肝の小葉構造とは無関係であると思われた。このような結節性線維化病変の成り立ちを推測してみると，まず，肝細胞の脂肪変性巣～脂肪嚢胞が形成され，中心部が壊死におちいる。これに反応して細網線維や膠原線維が増生，病変は同心円状に次第に拡大し（写真3，トリクローム，×150），隣接した病変が癒合，大きな病変を形成していったと考えられた。しかし，何故線維化が結節性におこったかは不明であった。また，脂肪変性巣どうしをつなぐ形の瀰漫性線維化もみられた。

病理組織学的診断：肝の結節性線維症。